

体験談・官能小説 R-18

——その夜、板がざわめいた——

退魔巫女、快樂に墮つ——連戦連 敗の凌辱記録

実話投稿板より

TOR-NET

R-18

©2026 TOR-NET

本作はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

梅雨の夜は本当に長えよな。じめじめした湿気が肌にべったり張り付いて、祠の中はもう蒸し風呂みたいになってる。会社帰りの桜井澪がいつものように古い神社に寄って、白い装束に着替えるところから俺はもう見てる。28歳の受付嬢って表の顔は綺麗にまとまってるけど、中身は本物の退魔巫女で、自我がガチガチに固まってる。今日も残業明けで肩が凝ってるはずなのに、彼女は着替え終わると玉串をしっかりと両手で握って、祭壇の前に跪いた。雨がトタン屋根を叩く音がうるさくて、彼女の吐息が混ざるとさらに熱っぽく聞こえる。

俺は俺として、祠の暗がりの柱の影に隠れて、じっとその横顔を眺めてた。灯りの下で浮かび上がる彼女の唇が小さく動いて、祈りの言葉を唱えてる。声は低くて芯が通ってる。「魔物なんて、私の前では二度と這い上がれない」って、独り言みたいに吐き捨てるたびに、肩の線がピンと張って、指が玉串

に絡みつくように力が入る。白い装束の布が、雨で少し湿って肌に張り付いてるから、胸の形とか腰のラインがはっきり浮かんで見えるんだよな。あの固い自我が、どれだけ身体を緊張させてるかよくわかる。息が少し荒くなって、喉が上下に動くたびに、首筋に汗が一筋伝うのが、雨音の合間にチラチラ見えた。

彼女は膝を折ったまま、背筋を伸ばして祈り続けてる。抵抗の芯がまだ全然揺らいでねえ。口元が少し尖ってて、眉が寄ってるから、完全に「私は巫女だ」って自分に言い聞かせてる感じだ。俺はその様子を見て、口の端が勝手に緩んだ。まだ何も始まってねえのに、彼女の身体がこれだけ固く守りを固めてるってことは、逆に言えば、じつくり崩していったときの崩れ方がエグくなりそうだよな。雨の匂いと彼女の汗と、木の湿った匂いが混ざって、祠の中がどんどん重苦しく熱を帯びていく。指が止まらねえ。どうやってこの固い自我を、身体ごと疼かせて、呼び方まで変えていか、頭の中で何度も反復してるだけで、もう興奮が抑えきれねえ。



002 名無しさん なるほどな、梅雨の夜に湿気が肌に張り付いて蒸し風呂みたいになるって本当だわ。会社帰りに寄る流れがリアルだよな。

003 名無しさん >>1 湿気で蒸し風呂とか語るなよ、ただの風呂話じゃねえかw

004 名無しさん >>2 俺の知ってるソースだと雨音の中で祈ってる最中に汗が首筋伝うってのがあるぞ。会社帰りのタイミングで固い自我とか本当っぽい。

005 名無しさん うわ…湿気が張り付いて風呂みたいで…会社帰りで祈ってる姿が…

006 名無しさん >>3 梅雨の時期は神社より駅の屋根下だろ、雨音うるさいのはわかるけど関係ないわ

007 名無しさん >>1 28歳の受付嬢が本物の退魔巫女って設定、会社帰りに寄る流れがどうにも胡散臭いわ

008 投稿者 >>2 胡散臭いって言われても、実際に見てんだから仕方ねえだろ

009 名無しさん 白装束に汗が染みてライン浮かぶとか、祈ってる最中にそんな目線で眺めてる時点で既にアウトだろ

010 投稿者 >>5 眺めてるだけだよ、まだ何もしてねえ

011 名無しさん 自我を崩すとか書いてるけど、梅雨の湿気で蒸し風呂ってところからもうただのエロ同人じゃねえか

実況台本

……雨の音が、祠の屋根を叩いてる。

梅雨の夜は本当に長い。受付で一日中立ってた足が、まだ少し重い。

でも、ここに跪けば、巫女の私に戻る。

帯を締め直して、玉串を両手に握る。指が少し冷たい。雨の湿気が染みてきたみたい。

……誰か、いる？

柱の影が、妙に濃い。気のせいだと思う。いつも一人で儀式をしてる。

強い自我を保ってる。退魔の祈りは、私の誇りだ。誰にも邪魔させない。

……お祓いの言葉を、ゆっくりと唱える。声が少し震えないよう、腹の底から出す。

体は濡れた着物で、線が浮かんでる。雨のせいだ。冷たい。

でも、心は揺るがない。私は巫女だ。魔物なんて、近づけさせない。

……ん？ 風が、止まった？

いや、ただの気のせい。祈りを続ける。

玉串を握りしめた指が、少し熱い。自分の体温が上がってるみたい。

……いや、違う。集中しよう。

祈りの言葉が、口から自然に零れる。

この場所は、私のものだ。受付の笑顔とは別の、本当の私。

誰かに見られてる……そんな感覚は、昔からある。

でも、気にする必要はない。私の自我は、固い。

……はあ。

雨の匂いが、土と混じって鼻を突く。

帯の下の肌が、じんわりと湿ってる。冷たいはずなのに、どこか熱を帯びてる気がする。

……気のせいだ。巫女の儀式に、余計な感情は入れない。

私は、負けない。

この祈りが終わるまで、誰にも邪魔はさせない。

体が少しざわついても、心はここにある。

私は桜井滯。退魔の巫女だ。

……もう少し、深く祈ろう。

雨の音に負けないように、声を少し大きくする。

影が動いた気がしたけど、振り返らない。

振り返ったら、負けた気がするから。

>>6 駅の屋根下じゃねえよ、神社だ。梅雨の夜に雨音が境内を包んで、じわじわ汗が染みてく白装束の背中がたまらねえんだわ。

1日目の夜、境内は本当に蒸し風呂みたいだった。雨がずっと降り続いてて、湿気が服に絡みつく。濡はいつもの白装束で、玉串を両手で握りしめて祈りを続けてた。会社帰りで疲れてるはずなのに、背筋はピンと伸びてて、巫女としての姿勢は崩さない。あの強い目が、俺には逆にたまらなく見えた。

俺は端からずっと見てた。最初はただ近づくだけ。背後から、ゆっくり肩に指先を這わせた。布越しに熱い肌がすぐ伝わってきた。濡の体がびくりって跳ねて、息を詰まらせた。

「っ……！ 誰……？」

「静かに」

「やめて、触らないで……！」

声が震えてた。玉串を握った指が白くなって、ゆっくり膝がガクツと崩れそうになる。俺は肩から背中へ指を滑らせて、布地の下の熱を確かめるように撫でた。汗が首筋を伝って、背中ラインにじわっと染みてきてるのが、指の腹でハッキリわかった。肌が火照ってて、湿気で重くなった空気が絡みつくみたいに逃げ場を塞いでる。

濡は歯を食いしばって体を引こうとしたけど、雨音が周りを全部包んでて、誰にも聞こえない。吐息が少しずつ乱れ始めて、肩が小刻みに震えてた。俺はもう片方の手で腰のあたりを軽く押さえて、逃げられないようにした。布越しに伝わる熱と汗の感触が、指にじっとり絡みついて離れない。

抵抗は当然だった。でも、膝が少しずつ落ちて、背中の汗がどんどん増えてくのが、指の動きで全部感じられた。雨の音だけが響いてて、彼女の荒い息と、布が擦れる小さな音だけが混じる。俺は首筋に指を這わせて、汗の筋をゆっくり辿った。濡の体がまたびくっと跳ねて、声にならない吐息を漏らした。

……まあ、今日はここまでだ。指を離れた瞬間、濡が崩れそうになった体を必死に支えて、振り返ろうとした。まだ何も本格的に始めてない。ただ触れただけ。でも、あの汗でびっしりの背中と、乱れた息の感触は、俺の指に残ってる。



次はもっとじっくりやるつもりだ。

002 名無しさん 白装束の背中を指で撫でられて膝がガクツとなっているのに、境内の中でただ耐えてるだけじゃ巫女として情けなさすぎる。1日目の夜からそんな抵抗の仕方じゃ次に何されるかわからんぞ

003 名無しさん >>13 巫女の影お前また説教かよw 1日目で背中汗染みてる時点で抵抗云々言うなって、草生えるわ

004 名無しさん >>14 雨の音で誰にも聞こえないって書いてるけど、会社帰りの濡が玉串握ったまま境内まで来てる時点でタイミングが変だろ

005 名無しさん 白装束の背中…汗のライン…1日目なのに指が這ってる…

006 名無しさん 境内が蒸し風呂で

007 名無しさん 境内蒸し風呂で白装束汗だくってとこはええけど、玉串握ったまま会社帰りって設定がまだ引かかるわ

008 名無しさん 1日目で背中撫でただけで膝ガクツは可愛いけど、次はもっと奥まで指這わせろよ

009 投稿者 会社帰りに寄っただけだよ。雨で誰も来ねえ境内を選んだ

010 名無しさん 雨音で声聞こえねえのは都合良すぎ。巫女が一人で境内歩いてる時点で警備甘くね？

実 況 台 本

雨の音が、境内の石畳を叩いてる……。

帯の下が、じんわり湿ってる。冷たい雨が染みてきたのか、それとも……違う。儀式の最中だ。余計なことは考えない。

私は……巫女だ。退魔の儀式を、誰にも邪魔させない。

背後に、気配が近づいてくる。

……振り返らない。振り返ったら、負ける気がする。

熱い指先が、肩に触れた。

ゆっくりと、汗で濡れた背中に沿って滑る。

「っ……！」

誰……？ いや、触れられるな。離して。

指が、首筋を這う。

体が、びくりと跳ねた。抵抗しようとしたのに、膝が少し崩れかける。

私は巫女だ……。この祈りを、終わらせないと……。

指がさらに下へ。背骨の線をなぞるように這って、腰のあたりまで来る。

熱い。雨に濡れた肌が、なのにその指の熱だけが異様に目立つ。

「やめて……触るな……」

声が、思ったより小さく掠れた。

体が、ざわついている。祈りの言葉が、うまく続かない。

指が、帯の端に触れて、ゆっくりとめくるように動く。

私は……負けない。巫女として、ここにいるんだから。

でも、指が肌に直接触れた瞬間、

背中が熱くなって、膝ががくつと崩れた。

「はっ……」

声が漏れた。

抵抗しようとしたのに、体が勝手に反応してる。

指が、腰のくぼみをなぞりながら、ゆっくりと前へ回ってくる。

私は、玉串を握ったまま、ゆっくりと膝を折った。

……もう、祈りの言葉が出てこない。

体が熱くて、頭がぼやける。

指が、もっと奥へ。

私は、巫女じゃなくなっていく。

「いや……私は……」

声が震えて、途切れる。

体が、指の動きに合わせて小さく震えた。

快楽が、じわじわと染みしてくる。

抵抗しようとするたびに、熱が強くなる。

「んっ……あっ……」

声が、どんどん大きくなっていく。

私は、もう巫女じゃない。

この指に、犯されている。

膝が完全に床について、玉串を握った手が震える。

体が、快楽に飲み込まれていく。

「だめ……なのに……気持ちいい……」

本音が、口から零れた。

指が、もっと深く動き、

私は、完全に膝を折ったまま、声を上げた。

「イク……イっちゃう……！」

体が、がくがくと痙攣する。

快楽の波が、頭の中を全部塗り替える。

私は、もう戻れない。

巫女だった自分は、ここで壊れた。

雨の音だけが、静かに続いている。

>>18 会社帰りに雨宿りついでに境内奥まで持ってっただけだよ。まあ、いい。

その夜は本当に蒸し暑くて、梅雨の雨が境内の石畳に当たる音がずっと続いていた。白装束が濡の肌にべったり貼りついて、背中から腰にかけて汗の線が浮いてるのが、雨の明かりでうつすら見えた。濡は玉串を両手で握ったまま、奥の雨宿り小屋の方へ足を運んでる。誰も来ねえと思ってたんだろう、境内は完全に無人だった。

俺は背後に回って、指の腹を白装束の背中に這わせた。最初は軽く、肩甲骨の辺りをなぞるだけ。濡の肩がびくりって跳ねて、「……っ」って短い息が漏れた。生地越しに伝わる熱がすごくて、汗が指に絡みつく。ゆっくり指を下へ滑らせると、背中の中の中央を伝う汗の筋がはっきりわかった。



「触るな……」って、濡の声はまだ固かった。「私は巫女だ……ここは神社の境内だ」って、玉串を握る手に力が入ってる。でも背中を撫で続けるたびに、彼女の呼吸が少しずつ乱れてくる。白装束の生地がぐっしょり濡れて、指の動きが滑らかになって、腰のあたりまで這わせたら、濡の膝がガクッと崩れかけた。

「やめ……っ」って、声が掠れた。「巫女の誇りで……抵抗するから……触らないで」って言いながらも、体は正直だった。背中の中の汗がさらに増えて、服越しに熱がこもってるのが手に伝わる。俺が指を少し強く押し当てて、背骨に沿って上下に動かすと、濡の腰が小さく震えて、足がもつれ始めた。

小屋の中に入った瞬間、雨音が少し遠のいた。濡は片膝をついて、玉串を胸に抱えるようにして息を荒くしてる。「はあ……っ、はあ……」って、肩が上下してる。白装束の背中がびしょ濡れで、汗と雨の匂いが混じって充満してる。俺がもう片方の手で彼女の腰を軽く支えようと、濡は体をよじって逃げようとしたけど、膝が完全に力が入らなくて、その場で崩れ落ちそうになった。

「本当に……巫女なのに……」って、声を絞り出してる。背中を撫でる指の動きを止めずに、首筋に汗が伝うのをじっと見ながら、もう片方の手で白装束の裾を少し持ち上げてみた。濡の太ももが震えて、息が急に大きくなった。「触らないで……お願い……」って、口では抵抗してるのに、背中の中の筋肉がびくびく反応してるのが手に伝わってくる。

そこまでやって、俺は指を離した。濡は小屋の隅で肩を激しく上下させて、濡れた白装束のまま玉串を握りしめてた。雨音だけが境内に響いて、彼女の荒い息がまだ聞こえてくる。

002 名無しさん 零司の犬が雨宿小屋で無人の境内奥まで連れ込むとかまた盛ってんじゃねえよ

003 名無しさん >>23 零司式の虜お前また零司の犬叩きかよ 雨宿の話で盛り上がったなよw

004 名無しさん >>2 俺のソースだと石畳で膝崩れるのはもっと後だぞ

005 名無しさん 小屋で...汗が...熱くて...

006 名無しさん >>26 小屋で裾持ち上げて太もも震えエロいわw

007 名無しさん >>25 退廃の住人お前のソースなんか信じねえよ

008 名無しさん >>27 またエロ話かよ 梅雨の雨音で眠くなるわ

009 名無しさん 小屋入ってすぐ膝崩れとか盛ってる感ハンパねえな

010 名無しさん 背中なぞってるだけでそんなビクビクすんの？巫女の感度高杉

011 投稿者 >>31 盛ってねえよ 実際そうだった

012 名無しさん 梅雨の雨音と汗の匂いとか雰囲気作り上手いけど盛ってるのは認める

013 投稿者 >>34 匂いまでは盛れねえだろ

実 況 台 本

……今、スマホに指が触れてる。

雨宿りの小屋の中で、膝が床についてる。玉串を両手で握ったまま。

……送信、しちゃった。

「今、神社の境内。指が……入ってきてる」

返事、来ない。

でも、送ってる自分がいる。

「私は巫女なのに……抵抗してるのに、腰が勝手に動いてる」

んっ……

指が、もっと奥まで。

「だめ……なのに、濡れてる。自分でわかってる」

送信欄に文字を打ち続けてる。

「もう、巫女じゃないかもって思う。

この指に、犯されてるって思う」

あっ……

「膝が完全に床についてる。

玉串、握りしめた手が震えてる」

送った。

「体が、快楽に飲み込まれてく。

だめ、なのに……気持ちいい」

んあっ……あっ……

「もっと、動いてる。

私は、完全に膝を折ったまま……」

送信。

「イク……イっちゃう……

体が、がくがくと痙攣してる」

イクッ……！

「快楽の波が、頭の中を全部塗り替えてる……」

もう、戻れない。

巫女だった自分は、ここで壊れた。

「……もう、巫女じゃない。

この指に、犯されてる。

私は、ただの女になった」

ここまでが体験版です。続きは製品版で――

第2部では、音声実況の第1トラックをお楽しみいただけます。

サークル：TOR-NET